

佳作

『大学教育について』 J・S・ミル著 竹内一誠訳

(中央新書・文庫 岩波文庫；白(34)-116-10)

経営学部4年 宮木秀明

この本では19世紀イギリスの思想家J・S・ミルが大学教育において何が大事かということ論じている。ミルは大学教育は専門教育や職業教育ではなく、教養教育をする場であると主張する。

なぜ専門教育ではなく教養教育を重視するのか。それは、ミルが教養教育こそ人間教育の最も基本となると考えているからである。大学は専門家を養成するのではなく、まず有能で教養ある人間を作り出さねばならない。専門知識は教養がなくても身に着ける事が出来る。だが、そうした人間が正しく行動し、専門的知識や技術を活用できるとは限らない。専門知識をちゃんと活用するためにも、教養がその基礎となるとミルは言う。

一般教養とは広く浅い知識ではない。物事の全体は把握できなくとも、その要所、本質を捉えることである。狭い専門知識の分野にのみ囚われてしまつては視野の狭い人間になってしまう。それで豊かな人生が送れるだろうかとミルは問いを投げる。様々な物事の一番大切な部分を知ること、それこそが教養である。ミルのこの考えにハタと膝を打つものがある。

教養はおそらく現代においてはさらに切迫したものである。教養とは生きていくために無駄なもの、要らないもののように考えられがちだが、むしろ生きていく上で最も重要なものになるはずだ。無論専門知識や技術が仕事に活き、それが生きるうえで大切になるのは間違いない。だがそれはその専門的仕事のみにおいて生きるのであり、仕事の間を含めた生活全体の中でどのように生きればよいかという指標になるのは教養の方である。先行きの不透明な社会での立ち振る舞いはその人の教養によって決まる。それゆえに教養は専門知識に先立ち、真っ先に身に着けなければならないのである。私はそう考える。

日本では今時代の変化に伴い、実用的な英語の教育や、仕事の間で役に立つための実学的教育が大学でも進んで取り入れられている。だがそのような実用的な教育、職業教育をすることを、もしミルが今生きていたら反対するだろう。大学教育で何が一番大切なのか、それは各自それぞれ違う答えがあるかもしれない。だがその答えを決めるのは間違いなくその人の教養であると思うが、いかがであろうか。